

12.上山のお講

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 隆宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6966

12. 上山のお講

太田 隆宏

1. はじめに
2. 上山におけるお講
3. 実際のお講の様子
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

私は、今回の調査実習では特に上山に聞き取り調査に行く機会が多かった。調査に行くと、どここの家でも誇らしげに立派な仏壇を見せてくれた。「上山は仏事に厳しい。罰則はないが世間体が問題」(70歳代男性)、「ここいらの山の者が石川県で一番仏事を大事にする」(70歳代男性)といった声も多く聞かれ、お講についてもたくさん話を伺った。

私は「真宗王国」として有名な北陸地方の石川県で育った。それにもかかわらず、祖母が他所で在命であるためか、自分の家には仏壇もなく、仏教に関わる機会といえばお葬式と法事くらいのものであった。お講というものも全く知らず、浄土真宗で最も有名なお講である報恩講も、名前を聞いたことがある程度のものであった。そのため、上山の人々の信仰心の強さに驚き、農繁期以外はほぼ毎月行われるというお講がどんなものなのか詳しく知りたいと興味を抱くようになった。

本章では、2節で上山で行われている、または行われていたお講をとりあげ、3節で実際に行われた報恩講と鏡餅講の様子を記述しそれらを比較する。続く4節では上山におけるお講の現状について考察していく。

2. 上山におけるお講

以下では上山で行われている、または行われていたお講を年間スケジュールにそって順番に挙げ、その概要について記述していく。

(1) 一日参り^{ついで}

毎年元旦の朝行われる。檀家1軒につき少なくとも1人がお寺に集まる。このとき1人3合のお米を持ち寄る。このお米は御仏供米(オブクマイ)と呼ばれ、お寺に寄進される。10時頃からお勤めが

始まり、それが終わるとみんなで昼食をとり、お酒を飲む。住職によると門徒総会のようなもので、お勤めのあとの昼食はほとんど新年の宴会に近いそうだ。

表1 上山におけるお講の年間スケジュール

1月1日	一日参り
1月3日	若衆講（現在は鏡餅講が行われている）
1月4日	鏡餅講（現在は1月3日に繰り上げ）
5月20日	相続講
10月28日	報恩講

*この他にも毎月（4月は除く）28日には二十八日講が行われる
（聞き取りから筆者作成）

(2) 若衆講（ワカイシュコウ）

20～35歳の男性が集まって行うお講で、「若い衆のお講」、「若者お講」、「札お講」とも呼ばれている。毎年1月3日に行われていたが、5～6年前からなくなってしまった。これは若衆講の中心となる壮年団が、若い世代の減少と共になくなってしまったことが原因である。

お講はお勤め、御消息の読み上げ、くじ引きの順で行われる。御消息とは本山である東本願寺から下ってきた巻物のことである。このお講で読み上げられる巻物は明治8年（1875年）に書かれたもので、お講の名前は心得講となっていた。なぜ心得講と言うのかは住職もはっきりとはわからないようだ。くじ引きは青年団によって主催される。まず、1～100までの番号を書いた札を6セットつくり1枚100円で売る。次に、10cm四方の箱に数字の書いた竹の棒を入れ、その中から1本引く。そして、当たった人に景品を配るというものである。景品は高くても1000円くらいのもので、多くは切り餅やみかんなどの安いものだった。売り上げは壮年団のもので宴会の費用などに使われたという。

(3) 鏡餅講（餅お講）

各家から鏡餅を持ち寄り、競りを行うお講で、36歳以上の人たちで行われる。「年寄りお講」、「親父お講」とも呼ばれる。どこのお寺の門徒かは関係なく、集落として行われるお講である。毎年1月4日に行われていたが、若衆講がなくなってしまったからは1月3日に行われるようになった。餅は1升から2升分の餅米で作られ、お金に換算すると大体800円から1000円くらいだそうだ。餅を持ってこられない人は代わりに現金で2000円払う。最近は若い人が減り、餅をつく家が減ってきたのでお金で払う人が増えているという。また、この餅は「本山餅」と呼ばれ、売り上げは東本願寺に送られ、建物の修復に使われる。昔は「本山餅」を求めて、輪島などからもはるばる買いに来る人がいたそうだ。

お講はお勤め、御消息の読み上げ、餅の競り、お説教、恩徳讃の順で行われる。このお講で読まれ

る御消息は文政7年(1823年)に下ってきたもので、お講の名前は十五日講となっていた。このことを住職に伺ったところ、「昔は15日にやっていたのではないか」とのことだった。また、このお講は寺ではなく門徒の家で行われるもので、当番は部落¹⁾ごとに持ち回りで、部落の中で誰の家でやるか決めるそうだ。

餅お講の実際の様子については次節で詳しく記述する。

(4) 相続講

西保村以外の寺を加えた7つのお寺で組織されていたため、七カ寺講とも呼ばれている。現在では西保の西二又、上山、大沢の三カ寺となっている。2月から9月の毎月20日に行われ、2月は上大沢、3月は西二又、4月は農繁期のため休み、5月は上山、6月は下山、7月は赤崎、8月は小池、9月は大沢のお寺と決められている。このお講は焼失した東本願寺の建て直しの資金を集めるために明治18年(1885年)から全国の浄土真宗の寺院で始まったものである。お講の際には東本願寺から下ってきた御消息が必ず読み上げられる。御消息には「法義相続・本願護持」と書かれている。つまり、法義を相続するためには教えを伝承し、礼拝を行なう場所が必要だということである。そのため講を行い、寄付を集め、東本願寺に送りお寺の修繕費用にあてているのである。集落単位のお講ではあるが、お講のたびにそれぞれの集落の世話方が集落内を回り講銭としてお金を集め持って行くそうだ。

(5) 報恩講

報恩講は浄土真宗の最も重要とされるお講で、親鸞聖人の命日である11月28日を最終日(満座)として一週間にわたり行われる。しかし、上山では10月28日を最終日(満座)として一週間行われている。西二又の長誓寺では通常通り11月28日に行われているのに、なぜ上山では10月28日に行われるのか。願誓寺の住職に伺ったところ、「報恩講はどこのお寺の門徒さんとか関係なしにどのお寺でもお参りにいくんや。そうやし、長誓寺さんと日付が同じになってしまうとお参りに来る人が少なくなってしまうんや。沢山の人がお参りしてもらったほうが親鸞様も喜ぶし、そやさけ日付をずらしとるんや」とのことである。

お講は午後から始まる。お寺に集まり「お齋」(オトキ)と呼ばれる精進料理を昼食として食べ、お勤めをし、家に帰る。「お齋」は部落ごとに食べる日が決まっており、「お齋」食べる人は早めにお寺に集まるそうだ。満座の日にはお講の準備や手伝いをした人たちで「精進おとし」と呼ばれる夕食を食べ、お酒を飲む。これは準備や手伝いをした人たちを労うもので打ち上げのようなものだそうだ。

報恩講の期間は、親鸞聖人が生まれてから死ぬまでを15に分けて描かれた「御絵伝」(ゴエイデン)と呼ばれる掛け軸4幅が飾られ、最終日には「御伝鈔」(ゴデンショウ)と呼ばれる親鸞聖人の生涯を綴った巻物を読み上げられる。

また寺での報恩講が終わると11月から12月にかけて住職が檀家を回り、各家の仏壇にお参りをす。これも報恩講と呼ばれている。

実際の報恩講の様子については次節で詳しく記述する。

また、上記以外にも毎月 28 日には二十八日講が行われる。毎月とはいったが 4 月は農繁期のため行われない。

(6) 二十八日講

親鸞聖人の月命日である 28 日に行われるお講である。お寺に集まりお勤めをして、「お齋」を食べる。当番は「お講持ち」と呼ばれ、「お齋」の用意をしたりお講の世話をしたりする。この当番は部落単位で 1 月ごとに交代し、部落から 5、6 人が出され、その役目に就く。また、このお講に参加する際には必ず 1 人 3 合ずつ御仏供米(オブクマイ)を持ち寄りなければならない。

3. 実際のお講の様子

以下では、実際に行われた報恩講と鏡餅講の様子について記述していく。報恩講は 2006 年 10 月 28 日に願誓寺で行われたものに参加させていただいた。鏡餅講は 2007 年 1 月 3 日に上山の願誓寺の門徒さんの家で行われたものに住職に同行して参加させていただいた。

3-1. 報恩講の実際の様子

私が願誓寺に着いたのはお昼過ぎだった。中に入ると座敷に通された。座敷にはもうほとんどの人が集まっており、それぞれに世間話をしていた。集まっている人は皆年配の方で若い世代の人はほとんど見受けられなかった。

しばらく門徒さんと話しているとお講が始まる時間になり、皆本堂に移動していった。本堂に入ると、男性は前の方、女性は後ろの方に自然と分かれて固まって座った。

本堂の壁には「法事志 一金〇〇〇円」といった感じで、納めた金額と名前が書かれた紙が張られていた。仏壇には鳳凰の刺繍の入った豪華な打敷が掛けられ、花やお華束けそくが飾られていた。(写真 1、写真 2) 打敷は仏様の座布団を表しており、仏事の際には必ずかけるのだという。

まずは 4 人の僧侶によってお経が読まれた。そのうち 2 人は住職の息子さんだが、あとの 2 人は報恩講のために他のお寺から呼んできたものと思われる。しばらくすると、住職が仏壇の奥から出てきて、仏壇の前で何度かお辞儀をしてから席に着いた(図 1-1)。住職は席に着くと、御伝鈔取り出し、厳かに読み上げた。御伝鈔の読み上げが終わると、再びお経が読まれ、住職はまた何度かお辞儀をして席を立ち、今度は仏壇の横に座った(図 1-2)。

僧侶たちによるお経の唱和が終わると、続いて正信偈、念佛、和讃、御文の順で唱和された。正信偈からは、皆勤行集を開き、お坊さんの後に続いて唱和した。

唱和が終わると住職と僧侶は退席していき、長い柄のついたザルのようなもので賽銭が集められた。賽銭は 1 人につき 200 円だそうだ。その間に講壇や黒板が運び込まれ、お説教の準備がなされた。

写真1 打敷が掛けられた仏壇



写真2 お華束^{けそく}

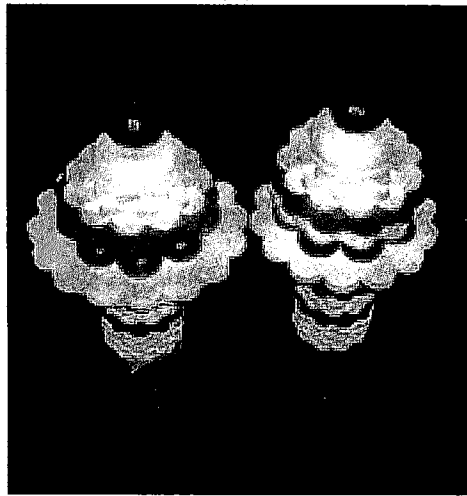


図 1-1

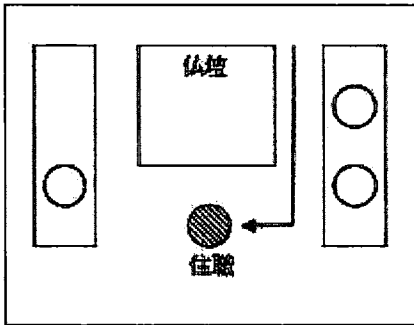
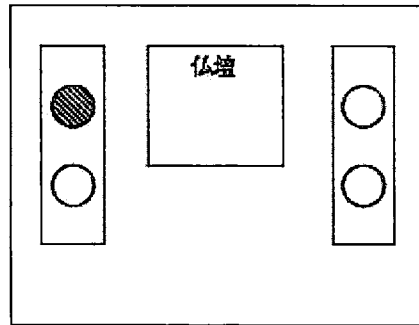


図 1-2



お説教は願誓寺の僧侶ではなく、他のお寺から招かれた僧侶によってなされた。報恩講の際はいつも他のお寺から人を招いてお説教をしてもらうそうだ。お説教は極めて厳粛に進められ、皆神妙な面持ちで耳を傾けていた。途中でいったん休憩がとられ、再び賽銭が集められた。1 回目の賽銭は願誓寺に、2 回目の賽銭は招かれた僧侶に納められるらしい。そのあと住職の挨拶があり、もう一席お説教がうたれ、報恩講は終了となった。報恩講は全体的に厳粛に行われたが、それでもやはり雑談が聞こえてくる場面もあった。

報恩講が終わると、男性の手で片付けがなされ、打敷や花、お華束などが次々としまわれていった。片づけが終わり、座敷に戻ると「精進おとし」が用意されていた。皆が席に着くと、住職からお講の手伝いへ感謝とねぎらいの言葉がかけられた。そのあと、皆で「食前のことば」として「み光のもと われ今幸に この淨き食をうく いただきます」と唱え、「精進おとし」を頂いた。「精進おとし」で振舞われたのは鶏肉と豆腐のおつゆ、こんにゃくの煮物、大根と人参の酢の物、ご飯、お酒などであった。

皆、美味しそうに「精進おとし」を食べ、お酒を飲み、会話を楽しんでいた。

3-2. 鏡餅講の実際の様子

私が会場に着いたのは午後1時頃だった。中に入るともう何人かの人が集まっていた。家の中はふすまや引き戸が取り外され、居間や仏間などの4つの部屋が一続きになっていた。床から天井まである大きな仏壇には綺麗な打敷がかけられており、鏡餅が飾られていた。人々は会場に着くと持ってきた鏡餅を受付しているところに持って行った。鏡餅を持ってこなかった人はその代わりとして現金で2000円を支払っていた。鏡餅は大体1升5合から2升分のもち米で作ってあるそうで、原価は800円から1000円ほどだそう。受付を済ませると人々は仏壇の前に席を取り、正月の挨拶を交わしていた。座る場所は自然と男性と女性に分かれ、部屋の前のほうに男性、部屋の後ろの隅の方に女性が固まって座った。

鏡餅講は36歳以上の人が集まって行われるお講であるが、報恩講と同じく、集まっている方のほとんどが年配の方で、比較的若い世代の人は全くいなかった。

午後1時半になるとお講が始まった。まずは門徒さんの代表によってお講の始まりの挨拶がされ、勤行集が配られた。住職が仏壇の前に座ると、賑やかだった部屋の中が静かになり、厳粛な空気が漂った。住職によって正信偈が唱えられると、皆頭を下げ、勤行集を見ながら住職の後に続いた。中には勤行集を持参している人、勤行集を見ずに唱えている人もいた。

15、6分ほどで正信偈の唱和が終わり、続いて御消息が読み上げられた。住職は仏壇に置かれていた包みを解き、丁寧に御消息の巻物を取り出し、少しずつ開きながら読んでいった。御消息を読み上げている間は皆顔を伏せ神妙な面持ちであった。しかし、雑談している人もちらほら見られた。ご消息が読み終わると何人かの人はありがたそうに「ナンマンダブナンマンダブ」と唱えながら手を合わせた。

読み上げが終わり、住職が仏壇の前から離れると、厳粛な空気が緩み、餅の競りの準備が始められた。その間に賽銭が集められ、1人100円か200円ずつお盆の中に入れていった。

準備ができると門徒さんの代表が前に立ち、「今年は見てのとおり餅が少ないので、競り上げてお買い上げのほどよろしく願います。また、年々持ち寄られる鏡餅が減ってきています。このままだと餅お講の本旨が無くなってしまいますので、皆さんご協力をお願いします」と挨拶をした。

そして、いよいよ競りが始まった。まずは仏壇に飾られた餅から競りにかけられた。競り親が「まずは一番良い餅。仏壇に飾ったやつ。じゃあ2000円から」と声をかけると、すぐに「2100円」と声がかかった。しかしそこからは値段が上がらず、2100円で落札された。そのあとも鏡餅の出来の良し悪しによって値段が付けられ、「他ないか」、「もう一声」、「さあ、どうや」などと声をかけながら競りが進められていったが、なかなか値段は上がらなかった。皆、「もっと大きい声で言わんと売れんわ」、「声がちっちゃいんや」などと笑いながら野次を飛ばしたりはするが、なかなか買おうする人は少ないようだ。競り親は「なかなか返事ないな」などと冗談めかして言いながらも、少しずつ餅を売って

いった。餅が少ないためか、途中で水羊羹や、福袋なども競りにかけられた。競り上げる人こそ少なかったものの、冗談なども交えられ終始和やかに競りは終了した。

競りが終わると、お説教が2席打たれた。お説教の最中は、皆そこまで改まった感じではなく、住職の言葉にうなずいたり感心したりといった様子であった。

お説教が終わると皆で合掌して恩徳讃という歌が歌われた。皆、歌詞を覚えているようで何も見ずに歌っていた。

最後に門徒さんの代表の挨拶でお講は終了となった。

上記の2つのお講に参加してみて思ったのは鏡餅講の宗教的な意義が報恩講に比べて薄いということである。これは鏡餅講が門徒の家で行われるということもあるだろうが、やはりこれらのお講の成立の違いによるものだろうと思われる。

相統講や報恩講は建物の建築、修繕費用を集めるため、親鸞聖人の命日を偲ぶためといった宗教的な目的から始まったものであるのに対し、若衆講や鏡餅講は、その始まりが宗教的な目的ではないのである。願誓寺の住職によれば、これらのお講は、最初はお講ではなく単なる集会だったのだろうということだった。それが後になって「こういう集まりがあるからそのときに読むための巻物を書いてくれ」といって本山に頼んで御消息を書いてもらって、宗教的意味がつけ加えられたのだそうだ。それゆえ、これら2つのお講は宗教的な行事であるにもかかわらず、他のお講に比べて娯楽的な要素を多く含んでいるのだろう。

4. 考察

以上、上山におけるお講についてみてきたが、お講は少なからず、宗教的な意義と娯楽的な意義の2つの意義を持っていると考えられる。「世間話が楽しくてお講に参加している人もいた」(80歳代女性)という声からもそのことがみとれる。

しかし、現代ではテレビなどのメディアや交通の発達により、わざわざお講に参加しなくても十分に娯楽を楽しめる。お講の娯楽的な意義が薄れてしまっているのである。それにより、お講離れが進んできているのだろう。

また、若い世代のお講離れや村に住む人数の減少も問題になっている。時代が進むにつれ、農業や林業をやめ、輪島などに会社勤めをする人が増えてきた。すると、仕事が休めないからお講に出なくなってしまう。また、金沢などに出て行って仕事をし、そこに家を構えてしまう若い世代も多く、村に住む若い世代の人数自体が減少していることも問題である。「戻ってくるのは盆と正月くらいで、報恩講にもでない」という声も多く聞かれた。

残念ながら若い世代の人々に話を聞く機会はなかったのが、若い世代の人々がお講についてどのよう考えているのかはわからないが、お講に参加する人がいないのは事実である。

若い世代のお講離れや、村に住む人数の減少といった問題は厳しいかもしれないが、上山独自のお講がなくなってしまうのは寂しいものがある。上山の、ひいては西保地区の多様なお講の数々が維持されていくことを願ってやまない。

5. おわりに

本章ではここまで上山におけるお講と現在の状況について考察してきた。しかし、お寺の住職に対する聞き取りに比べて、お講に参加する人たちへの聞き取りが不十分だったために、筆者による推測が多くなってしまい、反省している。また、上山だけでなく他の集落のお講についても調べて、比較できればよかったと思う。

最後になってしまったが、この報告書を書くにあたり、忙しい中聞き取り調査に協力していただいた上山の方々や、数回にわたる補充調査に快く協力して下さった願誓寺の住職とそこご家族に深い感謝の意を示したい。

注

¹⁾ ここでいう部落とは上山内の下位区分のことであり、小町、池田、上、新保、雑座、黒杉の6つがある。